

2020 年度事業 進捗報告書（資金分配団体）

- 提出日 : 2022 年 月 日
- 事業名 : 社会的養護下にある若者に対する社会包摂システム構築事業
- 資金分配団体 : 公益財団法人 ちばのWA地域づくり基金

① 実績値

【資金支援】

アウトプット	指標	目標値	達成時期	現在の指標の達成状況	進捗状況*
実行団体が、社会的養護下及び経験した若者やボランティアへ居場所を提供している。	居場所を利用する若者の数	3 拠点でのべ 400 人	2024 年 1 月	のべ 976 人（ベストサポート 864 人、はこぶね 112 人）	1
	居場所を利用するボランティアの数	3 拠点でのべ 90 人	2024 年 1 月	17 人（実数）（いっぽの会 2 人、はこぶね 15 人）	3
実行団体が、社会的養護下及び経験した若者に対し、既存事業にはない自立のための支援事業（就労支援・生活支援）を実施している。	自立支援プログラム（就労支援・生活支援）を受けた若者の数	2 団体で 30 人（実数）	2024 年 1 月	25 人（ベストサポートの個別アセスメント実施人数 21 人とシェルターでの生活・就労支援 4 名）	2
実行団体が、社会的養護下及び経験した若者向けにウェブサイ	支援情報の内容	社会的養護下及び経験した若者に必要な支援情報	2023 年 3 月	若者に向けてウェブサイト で情報を発信している団体	2

トにより支援情報を発信している。		が公開されている状態		は1団体。 他に SNS (Instagram、Twitter、YouTube) を介して支援情報を発信、公開している。	
実行団体が、既存支援対象者に対しアウトリーチを行い、情報提供を行っている。	アウトリーチした人数	4 団体で 50 人	2024 年 1 月	7 人 (いっぽの会)	3
実行団体が、地域住民に対して「社会的養護」の課題、支援の必要性の周知を行っている。	イベント、勉強会に参加した地域住民の数	100 人	2024 年 1 月	94 人 (いっぽの会 17 人、ベストサポート 47 人、はこぶね 30 人)	1
実行団体が、事業者に対して「社会的養護」の課題、支援の必要性の周知を行っている。	事業の説明をした事業者の数	120 法人	2024 年 1 月	77 法人 (ベストサポート：「社会的養護」の周知についての出前講座に参加した 77 法人)	2

【非資金的支援】

アウトプット	指標	目標値	達成時期	現在の指標の達成状況	進捗状況*
実行団体の運営基盤が整うために必要な学びの機会の提供、相談支援を実施する	合同研修会の開催回数	9回（年3回）	2024年1月	7回（2021年4/1、4/10、7/8、11/24、2022年2/8、2/9、5/19、9/29）	2
	資金調達計画の有無	計画ができています	2023年3月	計画はできていないが、月次面談・ワークショップにて資金調達を含む組織基盤強化支援を行っている。これらを通じて、はこぶねでは賛助会員を募集して会費が得られるようになり、現在6人が登録している。	2
実行団体以外の関係団体が情報共有会に参加できるよう、コーディネートや調整を行う。	参加するステークホルダーの数・種類	行政機関：5（県、4市） 実行団体に関連する団体：4団体	2023年8月	行政：3（国、県、1市）、 実行団体に関連する団体：8団体	2

*進捗状況：1 計画より進んでいる、2 計画どおり進んでいる、3 計画より遅れている、4 その他

② 事業進捗に関する報告

1.事業計画に掲げた短期アウトカムの達成の見込み
2.概ね達成の見込み
2.アウトカムの状況
A：変更項目 <input checked="" type="checkbox"/> 変更なし <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの内容 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの表現 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの指標 <input type="checkbox"/> アウトカムの目標値
5.新型コロナウイルス感染拡大に対して、事業活動を行う際に工夫した点
・月次面談、研修などはオンラインでも実施している。 ・対面の場合、①マスク着用・検温、②密集回避、③配置の工夫、④密閉回避（換気）、⑤消毒（手指、机、器具など）などに配慮している。
6. 実行団体の進捗に関する報告
・4団体とも事前評価結果を踏まえて事業計画の変更を行ってアウトプット、指標、目標値などこれまで暫定的に定めていた項目を整理し、事業目標達成に向けたロジックを明確にすることができた。 ・中間評価では、4団体それぞれの評価計画および評価方法への助言を経て、作成された中間評価報告書をもとに検証を行った。 ・組織基盤強化に向けた連続ワークショップ（2022年9月から2023年2月の間に5回連続）を実施。実行団体が課題としている資金調達等について支援を行う。 ・4団体とも助成金事業に不慣れなこともあり、事業を軌道に乗せることで精一杯の状態であったが、事業を実施する環境が整ったことや、課題が明確になったことにより今後の事業の進捗が期待できる。

③ 広報（※任意）

1.メディア掲載（TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等）	なし
2.広報制作物等	なし
3.報告書等	2021年度アニュアルレポート作成

2020 年度事業 中間評価報告書（資金分配団体）

評価実施体制

内部／外部	評価担当分野	氏名	団体・役職
内部	総括、資料分析、報告書作成	志村 はるみ	公財)ちばの WA 地域づくり基金 事務局長
内部	インタビュー、資料収集および分析、報告書作成、関係団体との連絡調整	大村 みよ子	公財)ちばの WA 地域づくり基金 プログラムオフィサー
内部	会計関係資料精査	元吉 智子	公財)ちばの WA 地域づくり基金 経理担当
内部	資料収集、資料整理、関係団体との連絡調整	北川 高司	公財)ちばの WA 地域づくり基金 PO 補佐
外部	資料および評価報告書の精査および、作成に係る助言	清水潤子	日本ファンドレイジング協会 社会的インパクトセンター パートナー 武蔵野大学 人間科学部社会福祉学科助教
外部	資料および評価報告書の精査および、作成に係る助言	岩崎 努	日本ファンドレイジング協会 社会的インパクトセンター フェロー
外部	インタビューへの協力	安達 空	一財)日本民間公益活動連携機構 事業部 プログラムオフィサー

A) 事業のアウトカムの進捗状況の評価

① 短期アウトカムの進捗状況

【資金支援】

アウトカムで捉える変化の主体	指標	目標値	達成時期	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
社会的養護下及び経験した若者	社会的養護下にある若者の社会的孤立を防ぐ地域連携包括支援モデル事業の案件数	社会的養護下及び経験した若者の社会的孤立を防ぐための地域連携包括支援モデル事業が2案件以上創出されている	2024年 1月	0件 地域連携包括支援モデル事業はまだ創出されていない。ただし、本事業の対象ではないが、事業開始後に2団体（いっぽの会、ベストサポート）で支援を始めた若者のケースについては、現在複数の関係機関が関わりを持っている。また、ちば子ども若者アフターケアネットワークコンソーシアムでは支援者間での定例会が隔月で実施されるようになり、本事業における地域連携包括支援モデル事業への好影響が期待できる。
社会的養護下及び経験した若者	会話の量や自己開示などの行動の変化	居場所に来る若者が、初期値より会話の量が増加したり、自分のことを他者（団体・ボランティア）に話すようになる状態	2024年 1月	居場所を行う3団体（ベストサポート、はこぶね、いっぽの会）のうち、2団体（ベストサポート、はこぶね）の若者において会話の増加と行動の変化が見られた。なお、いっぽの会については居場所事業を開始していないためアウトカムの変化は発現していない。 ベストサポートからは就労支援プログラム「きみらぼ」参加の若者について以下の報告を受けた。 「プログラム内に『名刺交換』という時間があり、回を重ねるごとに自分から名刺交換に行く若者が増えたり、心理士を介し

				<p>てではあるが、今まで講師への質問ができなかった若者が質問をする姿も見られてきた」</p> <p>また、社会的養護下の若者から信頼されるようになったボランティアを〈オトモダチ〉とし、その〈オトモダチ〉との関係性を若者の他者への信頼度の指標としているはこぶねからは、居場所に来る若者 16 人のうち 8 人に以下のような変化が見られたとの報告があった。</p> <p>「居場所において若者たちは、オトモダチに自分の身の上話をしたり、自分たちが抱えている問題を打ち明けたり、また、解決方法を一緒に考え、それに向けて行動するようになっていく」</p>
社会的養護下及び経験した若者	就労意欲の向上	就労意欲がプログラム開始時よりも増している	2024 年 1 月	<p>就労支援プログラムを行う 2 団体（ベストサポート、いっぽの会）のうち 1 団体（ベストサポート）のプログラムに参加する若者において変化が見られた。なお、いっぽの会については就労支援を行う対象者は中間評価時点で現れていない。</p> <p>ベストサポートでは就労支援プログラム「きみらぼ」の中で、名刺交換や職業適性検査のような参加型のコーナーを設けて、若者のモチベーションの維持を試みている。その結果、若者たちに以下の変化が見られたとの報告があった。「当初は児童養護施設職員に促されて参加していた若者たちだったが、プログラムを受講して施設に帰ったあと、施設の職員に『楽しかった』『また参加したい』と話すなどの積極的な姿勢が見られるようになった」</p>

	就労への具体的なイメージの有無	自立支援プログラムを受けた若者が、自分の向いている職業や希望する仕事(働き方)での就労に具体的なイメージが持っている状態	2024年 1月	就労支援プログラムを行う2団体(ベストサポート、いっぽの会)のうち1団体(ベストサポート)のプログラムに参加する若者において「職業適性検査により、参加する若者が自身の適正を把握している状態」と、わずかな変化が見られるものの、具体的なイメージの獲得には至っていない。なお、いっぽの会については就労支援を行う対象者は中間評価時点で現れていない。
社会的養護下及び経験した若者	居場所利用者数	3団体の居場所を利用する若者がトータルで120人 2022年より2023年、2023年より2024年の方が増加している状態	2024年 1月	居場所を行う3団体(ベストサポート、はこぶね、いっぽの会)のうち、現在2団体(ベストサポート、はこぶね)の居場所を若者が利用している。なお、いっぽの会については居場所事業を開始していないため若者の利用は0とする。 ベストサポート 3人(就労支援プログラム参加者で居場所を自発的に利用するようになった人数) はこぶね 13人(自発的に居場所を利用するようになった人数) いっぽの会 0人
	相談件数	4団体で相談を受けた件数トータル60件 2022年より2023年、2023年より2024年の方が増加している状態	2024年 1月	4団体で18件 社会的養護下にある若者からの相談は4団体とも受けている。

	支援内容（どんな支援がコーディネートされたか）	本事業開始以前よりも若者が必要としている支援に繋がっている状態	2024年 1月	4団体の事業実施により、これまで県内にはなかった社会的養護下及び経験した若者を対象とした居場所や支援者・支援方法（住居支援・生活支援・伴走支援）が増え、初期値より若者が必要としている支援につながりやすい状態になっている。 支援方法は、住居支援／病院への同行／行政手続き同行／別のNPOが運営するシェルターへの引継ぎ／実行団体間での支援の連携・引継ぎ。 現在、対象となる若者は「団体の直接的な働きかけ」か「団体のウェブサイトや広報」から支援につながっている。
地域住民	関わりたいという意欲の向上	ボランティアが、実行団体の実施する事業に主体的に関わりたいという意欲が初期値より向上している状態	2024年 1月	ボランティアと共に活動を行う2団体（はこぶね、いっぽの会）において、ボランティアの意欲の向上がみられた。 はこぶねでは、当初予定していたボランティア向け集団研修がコロナ禍により実施できず、代替として個別の研修形式に変更したところ団体スタッフと個々のボランティアの結びつきを強くすることが可能となり、その結果、ボランティアにおける事業への参加の積極性（チラシ作りやマニュアル作りへの参加）を高めることができた。 いっぽの会は、シェアハウス敷地内の畑の活用（スタッフとボランティアが共に作業を行う）を通して、ボランティアの意欲向上を図った。 2団体ともに、ボランティア希望者は団体の丁寧な説明や勉強会への参加を経ることで、積極的に関わりたいという意欲が向上した。

事業者	協力している事業所の数	「社会的養護」についての課題を理解し実行団体の事業に協力してくれる事業者 30 法人 (実数)	2024 年 1 月	<p>8 法人 (団体の働きかけにより、インターン及び就労の受け入れを表明した企業数)</p> <p>協力している事業者 (企業) が着実に出現しており、ベストサポートからは「本事業のスタート前には『福祉』とのつながりを持ったり、繋がろうとする企業は少なかった。しかし、企業を回り、丁寧に説明することで、相談に乗ってくれたり、インターン受け入れを表明する企業が出てきた。また、理解を示してくれた企業が、他の企業を紹介してくれるケースも出てきており、さらなる広がりが期待できる。」という状況を聞くことができた。</p>
-----	-------------	---	------------	--

【非資金的支援】

指標	目標状態	達成時期	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
実行団体の資金調達額	4 団体が資金調達計画をもとに事業継続に必要な資金の目処が立っている	2024 年 1 月	<p>資金調達は 4 団体とも課題があるため、実行団体に向けて本年 9 月からファンドレイジング計画を作成し実践するための連続ワークショップ（2023 年全 5 回）を開始した。</p> <p>変化が限定的であるが、資金調達に向けた試みとして、賛助会員の獲得を目的としたチラシの作成やクラウドファンディングの活用を検討している団体がある。資金分配団体として、チラシを作成している団体にはチラシ作成における情報整理とデザインへのアドバイスを行っている。また、クラウドファンディングを検討している団体には、前述のワークショップで CF 以外の資金調達方法を提案しながら、最適な方法を選んでいただけるよう支援していく。</p>
人材の成長度合い	事業担当者、会計担当者が決められた手続き、業務を遂行できる人材に成長している状態	2024 年 1 月	<p>4 団体とも課題がある状態。</p> <p>利用者への直接支援や事業者としての業務、また助成金事業に不慣れなこともあり、組織・事業を安定的に運営していくためのスキルや人材育成については着手できていない団体が多い。一方で、会計など自団体における課題を認識し学びを開始した団体もある。資金分配団体として、実行団体が課題を把握することの手助けと、解決に向けたリソースの提供を引き続き行っていく。</p>
ステークホルダーの数・種類	児童養護施設：20、自立援助ホーム：16、中核	2024 年 1 月	<p>4 団体全体（重複含まず）</p> <p>児童養護施設：13 件</p> <p>自立援助ホーム：2 件</p>

	<p>地域生活支援センター：8、行政機関：5</p>		<p>中核地域生活支援センター：13 件 行政機関：6 件 その他：19 件（大学、社会福祉協議会、フードバンク、ファミリーホーム、企業など）</p> <p>ちば子ども若者アフターケアネットワークコンソーシアムが「千葉県児童福祉施設協議会職業指導員部会」「千葉県中核地域生活支援センター連絡協議会」「千葉県社会的養護自立支援事業受託事業所ちばアフターケアネットワークステーション（CANS）」を中心とした定例会を開催していることもあり、資金分配団体が想定したステークホルダーの種類（児童養護施設、自立援助ホーム、中核地域生活支援センター、行政機関）と数は目標状態に近づいている。他の団体においては、企業やフードバンク、社協など民間の団体との関係を築いている。</p>
--	----------------------------	--	---



② アウトカムの分析「⑧アウトカムの達成度」(※任意)

評価小項目	評価小項目の評価結果	評価結果の考察
実行団体の事業を通して資金分配団体が最終的に達成したい目標や中間的な成果は達成されたか。	すべての実行団体に何かしらのアウトカムの発現が見られるが、資金分配団体が想定していた中間評価時点でのアウトカムに到達していない団体・事業がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・対象となる若者やボランティア、企業、組織等との関係づくりに関わる部分については、全ての実行団体に何かしらのアウトカムの発現が見られる。 ・特に代表者やメンバーの中に人との関係づくりを得意とする人がいる団体にその傾向が顕著である。 ・組織基盤に関わる部分（人材育成、資金調達、事務能力）については4団体とも課題がある。 ・実行団体においては実務作業がアウトカムの進捗に影響を与えていることもある。



事業のアウトカムの進捗評価	評価結果の考察
<p>事業のアウトカムの進捗の程度は、事業終了時には</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値を上回っての達成の見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値を達成の見込みがある</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値はおおむね達成できる見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は不透明である</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は難しいと自己評価する</p>	<p>短期アウトカムはおおむね達成の見込み。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助成金事業に不慣れな実行団体は事業を軌道に乗せることで精一杯の状態であったが、事業を実施する環境が整ったことや、課題が明確になったことにより今後の事業の進捗が期待できる。 ・さらに成果を確実なものとするために、実行団体のアウトカム進捗に影響を与える実務作業や事業実施に関する不安を丁寧に聞き、資金分配団体としてリソースを提供していく。 ・非資金的支援の連携体制については、実行団体の連携体制とも重なるため、指標の見直しを検討する必要がある。

B) 事業の改善状況の評価

① 事業の実施過程・事業改善に関する評価

評価項目	評価小項目	評価結果	考察
実施状況の 適切性	資金分配団体の活動は計画通りに実施されているか。	おおむね計画通りに実施されている。 目標値から見た実施状況は計画通りであるが、現在の指標では質的な変化が見えにくいため、質的な変化を捉えるための指標の追加を検討する。	資金分配団体の事業計画書（アウトプットの初期値～実績値）および実行団体との月次面談記録もとに以下の項目ごとに調査した。 【居場所事業（利用若者数・ボランティア数）】 ・居場所を利用する若者の数は1団体の人数が突出しているため目標値の約2.4倍の人数となっているが、居場所自体が開設できていない（利用0人）の団体もある。 ・居場所でのイベントの回数や、対象とする若者への団体のアプローチの仕方も、利用若者人数を左右している。 ・ボランティア数は目標値の2割弱と伸びていない。 【自立に向けた支援事業（就労支援・生活支援）】 ・目標値の約2.5倍の若者が自立支援プログラムを受けている。居場所同様、1団体の人数が突出している（もう1団体は実施に至っていない）。 ・生活支援を受けた若者は0人である。 【若者への情報発信・情報提供】 ・若者に向けた情報発信を主目的としたウェブサイトを開設した団体は1団体。年内に完成予定の団体が1団体。 ・SNS（Instagram、Twitter、YouTube）の活用を開始している団体は3団体。 ・すべての団体において、若者に向けた支援情報の発信を行っている状態にある。 【既存の支援対象者へのアウトリーチによる情報提供】 ・既存の支援対象者へ本事業に関する情報提供を行っているのは1団体のみ。

			<p>【地域住民への周知（課題・支援の必要性）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ イベントや勉強会への参加人数は目標値の達成間近。 ・ 3 団体において地域住民への周知を行っている。方法は「自治会への働きかけ」「回覧板」「地域新聞（地域の情報などが掲載されたフリーペーパー）での活動紹介記事の掲載」「地域の個人商店の利用を通じた周知」「地域のイベントへの参加を通じた周知」。 <p>【企業など事業者への周知（課題・支援の必要性）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 就労受け入れ先を増やすために事業者への説明を行っている 1 団体により 77 法人へ説明が行われた（目標値の約 6 割）。 <p>【実行団体への機会の提供・相談支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実施した 7 回のうち、評価を目的としたものが 2 回、情報共有を目的としたものが 3 回、組織基盤強化を目的としたものが 1 回、その他 1 回。 ・ 相談支援が行えているかどうかを評価するために「実行団体の資金調達計画の有無」を指標としている。3 団体が自己資金について「計画より遅れている」としている。 <p>【行政や実行団体以外の関係団体へのコーディネート】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行政や実行団体以外の関係団体以外が参加できる情報共有会は 1 回開催した。 <p>〈考察〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 資金分配団体の目標値から見た実施状況は計画通りであるが、現在の指標では質的な変化が見えにくいことがわかったため、質的な変化を捉える指標の追加を検討する。さらに、中間評価以後は実行団体の進捗だけでなく、「資金分配団体の仮説」「社会課題」「制度」からも本事業の実施状況を捉える視点も持ちたい。
--	--	--	--

	<p>実行団体による活動は計画通りに実施されているか。</p>	<p>実行団体による活動は概ね計画通りに実施されているが、共通する傾向として、「計画より進んでいるまたは計画通り」とした活動と、「計画より遅れている」とした活動の差が大きいため、4 団体とも事業計画の見直しや変更が必要である。</p>	<p>実行団体の事業計画書および進捗報告書・中間評価報告書をもとに団体ごとに調査した。</p> <p>【ベストサポート】短期アウトカム：概ね達成の見込み 〈計画通り〉居場所事業（特に若者の参加の部分）、就労支援プログラム、企業への周知 〈計画より遅れている〉地域住民への周知</p> <p>【はこぶね】短期アウトカム：課題がある 〈計画より進んでいる・計画通り〉支援対象者とのつながり・居場所利用、ボランティア、人材育成 〈計画より遅れている〉資金調達</p> <p>【いっぽの会】短期アウトカム：概ね達成の見込み 〈計画より進んでいる・計画通り〉周知活動、勉強会 〈計画より遅れている〉シェアハウスに関わるアウトプット全般</p> <p>【ちば子ども若者アフターケアコンソーシアム】短期アウトカム：課題がある 〈計画より進んでいる・計画通り〉連携モデル、リーフレット・報告書（連携・制度）の作成 〈計画より遅れている〉ネットワークに参加する支援者数、報告書（ネットワーク連携・活用ノウハウ）の作成、情報サイト、子ども・若者の参加</p> <p>〈考察〉 ・2 団体が「概ね達成の見込み」、2 団体が「課題がある」としている。「課題がある」と評価した団体も、その課題自体は中間評価時点で明確になっており、事業計画の変更や今後の活動の中での調整でカバーできるものと思われる。</p>
--	---------------------------------	---	---

			<p>・4 団体中 1 団体が事業計画の変更の必要はないとしているが、「短期アウトカムの目標値の達成は不透明」としているため、見直しは必要と思われる。</p> <p>下記の項目ごとにアンケートを実施し、実行団体に回答いただいた。アンケート詳細については別添資料を参照。</p> <p>【運営基盤「学びの機会」について】</p> <p>・今後、合同研修等で取り扱ってほしいテーマとして挙げられたのは「社会的養護に関する取り組みの事例共有」「他地域でのコンソーシアム型の取り組みや組織運営に関するノウハウ等」「実行団体 4 団体内での情報共有・交換の機会」。「特になし」と回答した団体が 1 団体。評価に関する研修は「難しい」という意見があった。</p> <p>【運営基盤「相談支援（月次面談）について】</p> <p>・改善点や提案については 2 団体から意見があったので、団体と協議しながら適宜反映していく。</p> <p>【運営基盤「人員体制」について】</p> <p>【運営基盤「財源」について】</p> <p>【運営基盤「運営面のスキル」について】</p> <p>・4 団体とも本事業によって運営面のスキルに関する課題や問題が顕在化あるいは増大している。さらに、それらに対しての伴走支援の関り度を「低い」と選択した団体も多い。</p> <p>・関り度合い「高い」を選択した団体へは、それがポジティブなものなのかネガティブなものなのかを、中間を選択した団体へは現状伴走支援で課題や問題を減少することができるのかを確認したい。</p> <p>【伴走支援に関する要望】 回答全文は別添参照。</p>
<p>実行団体が必要とする伴走支援を提供できているか。</p>	<p>実行団体が納得する伴走支援には至っていない状態であるため改善が必要。</p> <p>実行団体が相談しやすい環境づくりに取り組む（月次面談の実施方法と内容についての協議等）と同時に、伴走支援の納得度を知るための定期的なヒアリングやアンケートを導入するなどし、コミュニケーション不足を解消する。</p>		

			<p>〈考察〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4団体とも運営基盤の全部または一部について「課題や問題が増えた」と感じている一方で、伴走支援によってそれらが解決に向かっていると感じている団体は少ないということがわかった。実行団体へは「困りごとがあればすぐに相談してほしい」と常々お伝えしているが、実際に相談される機会はあまりない。「相談を」と声をかけるだけでなく「一緒に困りごとを解決する」という姿勢が欠けていたのではないかと。実行団体からの相談件数は増えつつも、実行団体の運営基盤に関する課題や問題は減少することを目指したい。 ・現在、3団体には研修という形で組織基盤強化を実施しているが、コンソーシアムへは行えていない。コンソーシアムが求める「助言・支援」はどのようなものを団体と協議したうえで、必要な支援を行いたい。
<p>実施をととした活動の改善、知見の共有</p>	<p>事業の進捗において必要な見直しが行われているか。</p>	<p>必要な見直しが行われていると考えるが、アウトカムをより効果的なものとするために「連携モデルにおける支援者側の変化の見える化」の検討を始める。</p>	<p>JANPIA 担当 PO に以下の意見と提案をいただいた。</p> <p>「各実行団体の事前評価を踏まえた事業内容見直しが行われ（～22年7月頃まで）、その内容を踏まえて資金分配団体自身の事業計画の見直しが行われたと認識している。中長期アウトカムから始まる、資金支援のアウトカム、アウトプット、活動においては、実行団体の事業見直しに基づき、自団体内および評価専門家を交えて整理され、文言や内容についても整理されていると考える。非資金的支援のアウトカム、アウトプット、活動においても、期中に必要と判断された連続研修会の内容や、実行団体とつなげたいステークホルダーの内容や数を明確化するなど、事業計画が見直されていると考える」</p> <p>「契約時から掲げられている短期アウトカム（資金支援）1に、目標値を『モデル事業が2案件以上創出』としているが、本事業で大切なアウトカムだと思う。事業終了後にも広く展開していくことが望ましい連携モデルについて、なぜそれ</p>

			<p>をモデルにすると良いと思ったのか、この事業での学びから見えてくるのではないか。モデルとなる要件として『受益者の変化を実現できること』と記載されているが、この連携モデルを使うのが支援者側であることを踏まえると、支援者側にとっての整理も含めてはどうか。事業を通じて作ったモデル事業が、どのような変化を受益者と支援者にもたらしたのかが見えてくると、支援者側の展開へのモチベーションにも近づくのではないか」</p> <p>〈考察〉 上記意見より、本事業において必要な見直しは行われていると判断した。また、連携モデルにおける支援者側の変化を捉える視点が現在の現在の計画に欠けていることがわかったので、それらを見える化する方法の検討を行う。</p>
	<p>実行団体への支援を通じて得た情報を十分に活かし学びを改善につなげることができているか。</p>	<p>見直した内容は事業計画に反映されている。今後も事業計画を変更する際は同様の方法で行っていく。 得た情報の共有と活用方法について検討する。</p>	<p>資金分配団体の事業計画書（新・旧）、ミーティングの記録をもとに調査した。</p> <p>〈考察〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4団体の事業計画変更完了後にはロジックモデルの作りなおしからはじめ、PO間および評価アドバイザーとのミーティングを重ねながら資金分配団体の事業計画の変更を行った。評価アドバイザーの客観的な精査により、見直した内容は事業計画に反映されていると判断する。 ・PO間の日頃の会話からの気付きも多いが、記録として残していないものが多いことがわかった。

<p>組織基盤強化・環境整備</p>	<p>プログラムオフィサーは育っているか。</p>	<p>必要な実務や実行団体とのコミュニケーションが円滑にできている</p>	<p>・PO2名がチェックシート（事業理解、実務、コミュニケーション、学びの4分野20項目）を用いて自己診断を行った。</p> <p>・自己診断の結果、5段階評価の3「必要最低限できている」～4「できている」の解答が多かった。</p> <p>1名は助成事業担当としての経験があり、案件形成から行ったため、事業理解、実務面でのポイントが高かった。</p> <p>1名は助成事業担当としての実績はなかったが、積極的に学ぶ姿勢があり、実務面やコミュニケーション面でもポイントが高いことがわかった。</p> <p><考察></p> <p>上記の結果から、必要な実務、実行団体とのコミュニケーションなど本事業の遂行に必要なプログラムオフィサーとしての力量は形成されていると判断する。今後、さらにポイントが上がるように努力していきたい。</p>
--------------------	---------------------------	---------------------------------------	--

② 短期アウトカムの状態の変化・改善に貢献した要因や事例

〈資金的支援〉

対象となる若者やボランティア、企業、組織等との関係づくりに関わる部分については、全ての実行団体に何かしらのアウトカムの発現が見られる。特に代表者やメンバーの中に人との関係づくりを得意とする人がいる団体では、質量ともに資金分配団体の想定を大きく上回る成果が出ている。

③ 事前評価時には想定していなかった成果

〈リスク管理に関する気付き〉

PO が常に実行団体の「先回り」をしてリスクを予測すること、また、PO 間で予測したリスクを共有すること、これらを習慣的に行うことを身に付けることができた。

〈事後評価に向けての気付き〉

評価計画～評価～報告書作成のそれぞれの過程において、実行団体に対してどのような支援をどの程度行えば良いか、具体的な方策を今回の中間評価で考えることができた。



④ 事業計画（資金分配団体）の改善の必要性の確認

- 社会課題のニーズに事業計画の内容は合致している
- 受益者や対象グループのニーズに事業計画の内容は合致している
- 事業計画に記載している活動は、アウトプット⇒アウトカムへのつながりが実際に確認できている
- 残りの期間の資金配分・人員体制・スケジュールは活動を円滑に行えるよう計画されている
- 短期アウトカム指標は、事後評価時に測定し、達成度を評価することが可能な内容になっている



事業の改善状況の評価結果	評価結果の考察
<p>残りの事業期間で、事業が短期アウトカムを達成するために、</p> <p><input type="checkbox"/> 事業計画は適切に改善されたといえる</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 事業計画を適切に改善する見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 事業計画の改善について、課題が残っていると自己評価する</p>	<p>〈実施状況の適切性〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受益者と支援者・実行団体それぞれの質的な変化を捉える視点が不足していることがわかった。特に実行団体への質的な変化を捉える視点の不足は、実行団体の伴走支援に対する納得感の低さという形で如実に表れたと感じる。今後の事業計画変更・評価計画・事後評価、実行団体とのコミュニケーションでは、この視点を意識して改善を図りたい。 ・社会的養護下にある若者に対する社会包摂システムの構築については、一人の若者を複数の団体で協力して支援するなど実行団体の連携も見られるようになり、想定よりも進んでいると感じるが、現時点では各実行団体が持つ社会資源の可視化と共有が十分ではないため、システムとは言い難い状況にある。非資金的支援として、情報共有・交換の機会創出による実行団体間の連携促進と、実行団体の持つ社会資源の可視化を行い、社会包摂システムの構築を目指したい。 <p>〈実施をとおした活動の改善、知見の共有〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当財団では日頃から組織内での情報共有を重視しており、そのため事業計画の変更や見直しはスムーズに行えている。一方、日頃のコミュニケーションの延長でそれらを行うことが多いため、記録しきれなかった事柄も多いことが中間評価でわかった。伴走支援体制の見直しと併せて得た情報の共有・活用方法を考える。 <p>〈組織基盤強化・環境整備〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自団体の組織基盤強化では、人材の確保、成長は順調に行われているが、自主財源の確保に取り組む必要がある。

	<ul style="list-style-type: none"> ・環境整備については、当初事業関係者やその周辺の関係者間のネットワークを想定していたが、コンソーシアムの実行団体の活動とも重なることがわかった。お互いの活動を整理したうえで、コンソーシアムの非資金的支援に取り組む。 ・今後は資金分配団体として、本事業における社会課題の見える化や周知を行っていくことが必要と判断した。
--	---

⑤ 中間評価結果を踏まえて今後注力したいまたは早急に取り組みたい事項をお聞かせください。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・事後評価への取り組み計画（研修、スケジュール、実施体制、実施方法） ・伴走支援体制（面談方法、内容）の見直しと実行団体に合わせた月次面談の方法を検討。 ・自団体内での情報共有と活用方法。 ・共通テーマ（社会的養護）に取り組む他地域の実行団体との情報共有、指標の検討 |
|--|

添付資料

- ・アンケート集計結果（PDF）
- ・PO 中間評価チェックシート（PDF）

活動の写真（画像データは1枚2MG以下、3～4枚程度）

社会的養護経験者の自立支援に関する研修会及び事業計画共有会（2021年7月8日 会場：TKP 千葉駅東口ビジネスセンター）



情報共有会（2022年5月19日 会場：トモカフェ（運営：一般社団法人はこぶね）



組織基盤強化連続ワークショップ（2022年9月～2023年3月）第1回（千葉市生涯学習センター）

